

NEW GENERATION CLIMBERS

#005

今泉結太

YUTA IMAIZUMI

森山憲一—文・写真



「岩場でうまいクライマーがカッコいいと思う」



PERSONAL DATA

出身地 茨城県牛久市

生年月日 2000年9月20日

クライミング歴 8年

主な戦績

2017年 ワールドカップ八王子大会35位

2017年 ボルダリング・ジャパンカップ13位

2016年 全国高等学校選抜クライミング選手権2位

最高グレード

ボルダリング四段、リード5.14a

ホームジム

スポレククライミングジム

<http://spoleclimbinggym.com>

5

月6日～7日、東京・八王子で、ボルダリング・ワールドカップが開かれた。3年連続で国別ランキング1位を保っている日本のボルダリングチームのレベルは非常に高く、ワールドカップ代表選手に選ばれることすら容易ではない。そのなかに16歳の高校生がいた。男子では最年少である。

その16歳は、茨城県に住む今泉結太さん。茨城といえば、ワールドカップチャンピオンに4度も輝いている野口啓代さんや、同じくワールドカップで活躍した小林由佳さん、前々回のこのコーナーに登場してもらった森秋彩さんなど、強いクライマーを数多く輩出している県。お隣の栃木は、昨年の世界選手権覇者、楢崎智亜さんの出身地でもある。「どうして北関東からは強いクライマーが続々登場するんですか？」と聞くと、「いやー、どうなんですかね。偶然だと思うんですけ

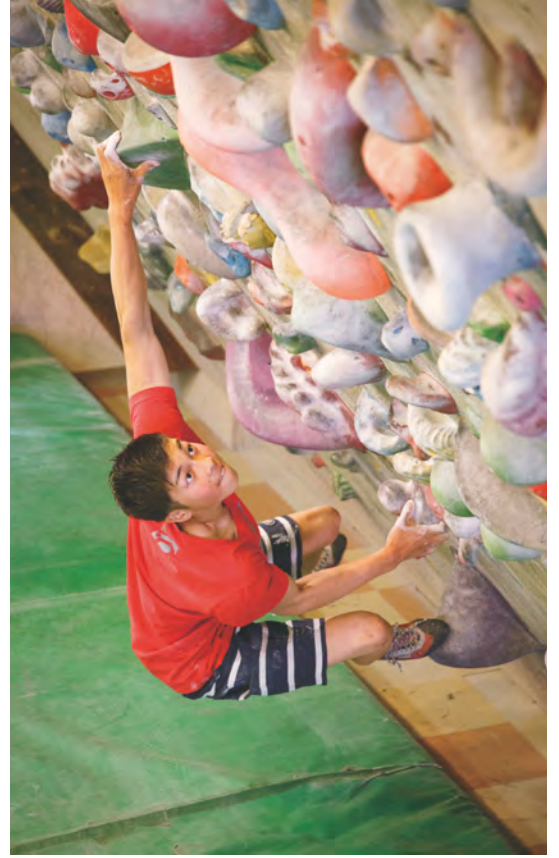
ど」と屈託なく笑う。素顔は、明るく物怖じしない高校2年生だ。

初のワールドカップの結果は35位。目標にしていた準決勝進出はならなかった。世界の課題に打ちのめされたか、それとも、結果には納得しているのか。

「感触はよかったです。最初の課題は緊張したんですけど、あとはリラックスして登ることができました。ワールドカップはさすがに足が悪いとは思いましたが、国内の大会とそれほど違いは感じませんでした」

「足が悪い」というのは、フットホールドが斜めだったり向きが悪かったりして、素直に体重を乗せられないセッティングになっているということ。しかしそれ以外は違和感はなかったといい、むしろ「これならやれる」という感触を得たという。

今泉さんがクライミングを始めたのは小学校3年生のとき。自宅近くの



左上)得意はキャンピング。足を使わずに腕だけで登るワザだ。左下)小学校4年生のときにおつかいで買ったチョークバッグをいまでも愛用。一度岩場でなくしたのだが、戻ってきたもの。シューズはファイブテンを愛用している。中下) 師匠の青木達哉さんと。「ティミー」(青木さんの愛称)とタメ口で呼び合う関係。右) 身長は170cmと平均的だが、登っている姿は見るからに身軽そう

「YOU ワールド」というレジャー施設に家族で映画を見に来たとき、映画館の隣にあったクライミングジムに興味を持ったのが始まりだ。「やってみよう」と親にねだり、以来、定期的に通うようになった。

しかし始めた当初は、自分が特別うまいとは思っていなかったと話す。それどころか、小学校時代は柔道をメインにやっていて、クライミングはたまに遊ぶくらいだったという。本格的にクライミングに取り組むようになったのは、中学生になってから。柔道で首を痛めたことをきっかけに、クライミングに転向した。つまり、本格的なクライミング歴はまだ4年ほどということになる。

それでも、ワールドカップ出場制限が解けた16歳になってすぐに、代表選手に選出された。ただし、八王子は開催国特別枠での選出。今年の目標は、海外大会での出場資格を得ること。17歳になる来年は、ワールドカップで世

界を転戦することが夢だ。

憧れのクライマーは？ と聞くと、少し意外な答えが返ってきた。

「トシさんですね。岩場で活躍するクライマーがカッコいいなと思います。もちろん、ワールドカップとか競技でいけるところまでいきたいと思っているんですが、ゆくゆくになりたい姿は、岩場を舞台に世界に発信できるクライマーなんです」

トシさんというのは、竹内俊明さんのこと。競技にはほとんど出場せず、国内外の岩場で高難度のボルダリング課題を追求しているクライマーだ。

「海外では(ドイツの)アレックス・メゴス。ぼく、顔が似てるってよくいわれるんです。似てませんか？」

メゴスもやはり、岩場を舞台に驚異のパフォーマンスを続けているクライマー(そう言われれば似ているかも)。オリンピック競技化が話題の現在、16歳の夢は当然そこかと思いきや、憧れ

は岩場だというのだ。

これには、スポーレというホームジムの影響が大きいかもしれない。スポーレの店長を務めている青木達哉さんは、ヒマラヤなどを登るアルパインクライミングで世界的に知られたクライマーでもある。兄貴のように慕う青木さんに誘われて、岩場にもよく出かけている。

「もう最近は、むずかしいところに連れて行っても数回で登っちゃうんで、ぼくがはじめてのルートには連れていけないようにしているんです。彼が先に登っちゃうと、師匠としての威厳が保てないんで(笑)」(青木さん)

この年齢、このクライミング歴の高校生にしては、これはかなり恵まれた環境といえるだろう。クライミングのスポーツとしての最先端を追い求めながらも、心はクライミングの源流である岩場に置いている。いまの時代、貴重かつ頼もしい16歳なのである。